

るかによってその社会的機能も変わるのではないだろうか。今日青年の私化状況と同調主義との深いつながりが問われているだけに、そうした疑問を抱いた。

第三に、「教育史と教育社会学」に関する方法論についてだが、周知のように近年教育社会学において歴史研究の新たな高揚がみられる。それは、教育改革の展望の模索と関わりつつ、同時に「revisionism」, 「社会史」などの本格的な紹介に刺激された「教育における近代」認識のパラダイムの転換をも志向する動きであるように思われる。またそれはウェーバーが設定した問いの原点とも深く関

わるであろう。著者は既に早い時期に教育社会学における教育史研究の位置付けに腐心し前著においてウェーバーの消化による方法論を提示している。そのような著者は、今日の歴史研究の展開をどうみるのだろうか。著者の積極的な論争提起を期待したかったように思う。

以上最後は勝手な注文ばかりを連ねたが、温厚な著者の語り口の奥の、一貫した硬派の情熱を感じておおいに刺激を受けた。

◆ B 6 判 251ページ, 2500円
明石書店

■ 書 評 ■

久富善之編著

『現代日本の教員文化の社会学的研究』

群馬大学 永 井 聖 二

教員文化の問題は、その重要性の指摘にもかかわらず体系的な論究には乏しい。本書は、この未開拓な分野に関する久富善之（一橋大学）、佐藤郡衛（日本青少年研究所）、油布佐和子（福岡教育大学）三氏による意欲的な協同研究である。

簡単に構成を紹介しておくと、

- 第1章 教員文化の社会学・序説（久富）
- 第2章 教員の指導観の実証分析（佐藤）
- 第3章 教員集団の実証的研究（油布）
- 第4章 学校づくりの中での教員文化革新（久富）

結 教員文化研究の前進へ（久富・佐藤）

となる。各章はそれぞれ独自のデータを用いた論文として読めるものであるから、以下、章を追って率直な読後感を述べていきたい。

第1章「教員文化の社会学・序説」（久富氏）は、深刻な病理現象を呈する今日の学校において、教員が生きて働く世界に「何が本当に起こっているか（what really happens?）」を明らかにするために、教員の行動の様式、世界解釈のシステムである「教員文化」に注目することの必要を説いたうえで、教員文化の中核

には教育界に特有に観察されるプラティク (pratique) を律するところのハビトゥス (habitus) が存在し、それは「学校制度のあり方に深く浸透されているけれど、なおその中にズレ・矛盾・緊張を含んだ動態とそれを律する原理となっている」ことを指摘する。そして筆者は「一見動かないように見える現代学校の支配的性格とそれが持つかくれたカリキュラムも、教員文化の内実変化を通して変わる可能性のあることをブルデュー『制度とハビトゥス』論は教えている」と主張し、「教員文化が内にはらむズレ・矛盾・緊張に注目し、その中に変化・発展可能性を見定めてゆかねばならない」という。続いて筆者は教員文化の体系性と歴史性を強調したうえで、児童演劇家の眼にうつった学校教員の事例から集団規律の格別の重視を、「いじめ」自殺事件の父母の眼にうつった学校教員の事例から教員の世界でディシプリンの確立がきわめて重視されていることや「生活指導問題の発生」を教員の「恥」とする意識を、「荒れる」生徒に対する教員集団の集団的努力が「形」の重視へと傾斜することなどを示している。さらに教員養成学部学生の「学校メタファ」の分析を経て、筆者は文化としての教員の多忙問題にふれ、日本の教員の仕事は「無限定性」を職業倫理として価値理念化する職業であることを示している。こうした筆者の論述は、筆者自身も認める7変数14アイテムに数量化Ⅱ類をほどこすというやや強引な手法を例外として、それぞれ適切であり説得力のあるものである。とくに文化としての教員の多忙問

題について、これを「無限定性」の職業倫理として整理したことは、すぐれた指摘として今後の研究に継承されるべき成果といえよう。

第2章「教員の指導観の実証分析」(佐藤氏)は、個々の教員の日常の学習指導・生活指導を規制し、あるいはそれを支える集団的な指導観を教員文化として位置づけて、これを日米比較することで、日本の教員の指導の文化的特質を明らかにしようと試みたものである。具体的なデータとしては、日本青少年研究所が実施した「日米中学校教員調査」(1985年)を再分析して用いている。かなりの規模の国際比較調査だけに、その結果はそれなりに興味深く、日本の教員の指導観を問い直してみるのに貴重な資料を提供している。ただ、率直なところこの種の国際比較調査にありがちな平板なデータ解釈については不満が残ることも事実である。たとえば「授業中、生徒を指名することが多いか、それとも講義形式か」という設問に対してでは、日米のサンプルに担当教科の点でかなりの差がある以上、読者は当然ながら教科を統制した場合にはどうなるかを知りたくなるのだが、単純集計の日米比較の他には日本の性別による差が示されているにすぎない。そもそもそこで示される日本の教員の性別の差が、年齢差を投影したものなのか、担当教科の違いを投影したものなのか、そのような要因を統制してもなお残る性別の差なのかということも、明らかにしなければならないことであろう。しかもそのことは、比較的容易に可能なことだと思えるのである。

もう一つ気になったのは、データを解釈して結論へ結びつける手順がきわめて直線的であることである。「成績中以上の生徒を中心に授業をするか、以下の生徒を中心に授業をするか」との設問で、以下の生徒を中心とすると答える教員が日本に多いことをもとにして、「アメリカの教員が業績主義を反映し、成績優秀者を中心に授業をすすめているのとは対照的である」とコメントを加えている部分などは、よしんば同じ結論に至るにせよ、もう少し緻密な解釈のプロセスが必要とされるのではなかろうか。「成績下位者を中心として授業をすすめる」ことが重要だと回答することと、その教員が現実にそのような方針で授業をすすめていることとは必ずしも直線的には結びつかない筈である。そのことを明らかにすることこそが、教員文化研究の課題とするところではないのか。そのことは本書の第一章でも久富氏が教員の多忙問題にふれ、日本の教員の忙しさを認めつつも、なお物理的多忙と多忙感を直線的に結びつけることの問題性を指摘して、無限定性の職業倫理にふれたことと同質の問題であろうし、第3章では油布氏が Sharp と Green のイデオロギーとパースペクティブの区別をひいて指摘したことでもある。

次いで示される数量化Ⅲ類を用いた指導観の類型化の結果では、サンプルスコアの推移からみて、日本の教員は年齢が高くなるにつれて指導に自信を深めていくが（その自信は規格化された指導観の内面化なのだが）、アメリカの教員には年齢にともなう変化がみられないという

ような、興味深い指摘がみられる。男女差はウォーラー（Waller, W.）の指摘どおりみられるのだから、なおさら示唆的な結果である。惜しむらくは筆者がその差をもたらし規定因についてコメントを加えていないのは残念である。また、日本の教員は学校内の相互の交流が活発だが、それが「インフォーマルな領域」ととどまっていたり、指導技術を高めあうといった関係にまで、なかなか立ち入っていかないことをデータで示したことなども、重要な指摘といえよう。全体としてこの章の記述と分析は隔靴搔痒の感があるが、比較文化的データから「日本」の教員文化の特質を解明しようとした研究として、多くの示唆的な結果を示していることも事実である。

第3章「教員集団の実証的研究」（油布氏）は、教員集団を学校の職場集団として捉え、教員文化の実態とそのもとの教育行為の差異を明らかにしようとしたものである。ここでは職場集団のタイプの違いにより、教員文化の基調である「調和を乱さない」という暗黙の規範が実際に機能する場が異なるというような従来の研究を越えた指摘がみられる。ただ教員集団の人間関係的側面に着目して職場集団としての教員集団を類型化するために用いられた手法は、因子分析によって析出した2因子を組み合わせて4象限のタイプに分類するという方法である。他の章の記述でも感じられることなのだが、因子分析にせよ数量化Ⅲ類にせよ、問題なのはこうした方法をとる場合の各タイプのネーミングの妥当性である。その後の記述で、一たびネーミングされた

各タイプ（ここでは「充実型」「葛藤型」「停滞型」「ぬるま湯型」）がかなり実体的に分析の主軸となっているだけに、気になる点である。またこの章の記述が教員集団の学校差を強調するのに急なあまり、因子分析によって析出された2因子の組み合わせによって構成された四つの教員集団のタイプと各々のタイプのもとでの教員の行動や教職観などを関連づけて論じること傾斜していることもどうであろうか。それは各タイプの肉付けの説明としては妥当であっても、基本的にはトートロジーの類いといえるのであって、それによって構成された4タイプの分析の道具としての妥当性を主張する根拠とはなりえないように思える。小学校はほとんどが「停滞型」か「ぬるま湯型」に属し、反対に中学校は「充実型」か「葛藤型」に属しているという事実は、ここで「職場内での交流の大小」を示す因子として抽出されている第2因子が実際には学校段階を示すものであることを示唆しているのではなかろうか。だとすれば、それは現在の小学校と中学校の置かれている状況の差異として理解するのが簡明で妥当であろう。われわれが研究上のアイデアを獲得しようと学校を訪問するとき、何といっても最も強く感じるのは小学校と中学校の雰囲気の違いである。このことは油布氏のコメントにある学級担任制と教科担任制の差ということだけでは説明しきれないことであろう。小学校か中学校のどちらかに限定したデータを収集した場合には、ここでの第2因子が析出されることがない以上、この第2因子による説明が学校段階の差はあるという

常識的な指摘以上の重みをもつことはまずありえないと思えるのである。

最後の第4章「学校づくりの中での教員文化革新」（久富氏）は、師井恒男「教師にとって愚直とはなにか」における教員文化の把握、批判とそれに対する挑戦の紹介や兵庫県府中小の学校づくり12年間の実践の事例などを取り上げて読みごたえがある。師井氏の実践の紹介などは、全くの二次資料なのであるが、実践のなかから生まれたウォーラーにも比肩すべき成果といってもよい程の内容の故に、そして単なる批判を越えた革新をめざすその実践の故に、迫力のある内容となっている。兵庫県府中小学校の学校づくり12年の事例研究が、また教員文化革新と学校集団過程とがからみ合いながら学校の再組織化が展開されていくプロセスが丁寧に紹介されていて示唆的である。久富氏が指摘するように、学校の再組織化への努力が「儀礼化 (ritualize)、単に教職員や父母からの同調を確保する道具になっている」ことが多いなかで、このような事例は暗夜の灯台とも位置づけられるものである。ただあえていうなら、それを可能にしたものが「学校をめぐる集団過程の民主主義的展開」だとする主張には、もう少し丁寧な論述を加えることを期待したい。（こうした主張に反対だというわけではない。念のため。）このような数少ないがすぐれた事例がいかにして可能なかを綿密に分析し、その可能性と条件を明らかにすることが、今後の教員文化研究の重要な課題の一つであると思えるのである。当然予想されるさまざまな reaction が学校集団過程のなか

でどのように克服されるのかというプロセスにこそ、紙幅がさかれることを期待したかった。筆者が別の機会にこの点を報告することを望みたい。

以上が章ごとの雑駁な読後感であるが、全体として本書について述べるなら、以下のようになる。

まず、本書が今日の学校教育の諸問題の解決のために問題にすべきテーマを適切に位置づけ、それに正面から取り組んでいることに敬意を表したい。従来の個人としての教師の実践を問題にする視点や逆に校長のリーダーシップや単層一重層構造論といった視点では等閑視され、なおかつ今日の学校教育のあり方を強く規制する教員文化の問題に正面から取り組んだことは、何よりも高く評価されるべきものと思われる。

取り上げられた事例はそれぞれに適切で、興味深く読むことができるものである。これに比べると定量的な調査の結果による記述は、必ずしも十分な説得力をもつものとはなっていない。論者によっては、これを定量的な質問紙法の限界と言うのかもしれないが、おそらくそうではないだろう。質問紙法による定量的な分析の限界にまで迫る試みを期待したい。それに関連して述べると、われわれは文化を問題にして、それとのかかわりで社会化の問題を取り上げるとき、一般に研究の対象としては多少とも社会成員に内面化される内容を指すことが多いのではなかろうか。本書では教員文化の変革の可能性を重視し、学校差を強調するあまり、かなり表面的な、たとえば転勤があ

れば容易に行動のパターンが変化するという類いの内容を問題にしているように読める部分がある。もちろん、それはそれで必要な視点だと思えるのだが、教員文化の多様性を強調することと、教員文化の複合体としてのトータルな性格をどのように矛盾なく扱っていくのかについては、これからの課題ではなかろうか。もちろん私見とても教員の社会化が教員文化の斉一性の模写 (replication-of-uniformity) を個々の教員が獲得する過程なのだと主張するつもりはないが、ウォラス (Wallace, A.F.C.) がいうような相異なるメーズウェイを持つ人々を結びつける多様性を組織するものを意味する organization-of-diversity というような視点は必要ではないかと思われる。そうした視点から教員文化とその学校差についての記述を整理しようとするならば、本書の定量的分析の部分の記述などは学校段階の差が教員文化に影響を及ぼしていることをはっきりと示すことで、より理解しやすいものとなるのではなかろうか。

とはいえ、本書がこれまでわが国の教育社会学の教師研究において正面から取り組まれることのなかった重要な問題について、さまざまな研究条件の制約のなかですぐれた成果をあげたものであることは疑いない。しかも、今日の学校改革論議のなかでも等閑視できぬ重要な問題に取り組んだ好著である。

◆A 5判 287ページ, 5800円
多賀出版